



研究調査報告

水辺の生活環境史

汽水域の漁撈—涸沼のスマキ—

安室 知
(非文字資料研究センター研究員)

1. 汽水湖としての涸沼

涸沼は茨城県の太平洋岸のほぼ中央に位置している(図1)。湖水面積 9.35 平方キロメートル、湖岸延長 20 キロメートル、平均水深 2.1 メートル(最大水深 6.5 メートル)。那珂川の堆積作用によりできた海跡湖である。太平洋に近く、潮の干満の影響を受け、約 6 時間おきに潮の流入を受ける。そのため、涸沼東部の湖水は汽水となる。淡水魚だけでなく海の魚も多く見られ、全体で 50 種以上もの魚類が棲息している。古くからコイ・フナ・ウナギ・スズキ・クロダイなどの魚類のほか、シジミなど貝類の好漁場として知られる。

涸沼の中でも涸沼川の流入口に当たる地域(涸沼西部)と涸沼川の流出口に当たる地域(涸沼東部)にはヨシやモク(藻)の繁茂する浅堆地が広がっている。このうち涸沼東部は、海から潮が逆流して滞水し、土砂が十分に涸沼川に排出されずに堆積してしまうため、とくに浅く広い浅堆地になっていた。そうした浅堆地は、潮が引いたときには島のように陸地化するセガタ(瀬潟)がところどころにできる。そのため、そこは江戸時代から近代に至るまで干拓による新田開発が行われてきた。

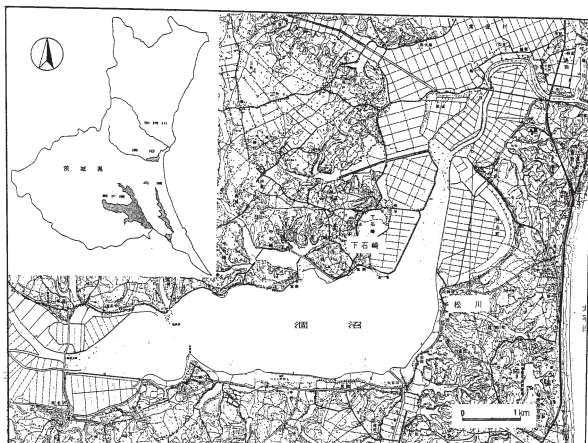


図1 涸沼の位置

2. スマキとは

汽水湖たる涸沼に伝わる特徴的な漁法にスマキがある(図2)。竹で編んだ簀を湖上に立てめぐらせて建造する。スマキの呼称はその形態から付けられたもので、漢字を当てるとなら簀巻ということになる。スマキは定置性迷入陥穽漁法(一種で、いわゆる琵琶湖のエリ(魷)と同様のもの)である。その特徴は内水面漁撈としては世界でも最大級の規模にある。涸沼においては全長 100 間(180 m)に及ぶものがかつて作られており、もちろん涸沼の中では最大規模の漁法である(図3)。

伝承の上では、涸沼においてスマキの歴史がもっとも古く、また今までにもっとも大型(全長 100 間)のスマキが建てられたところが松川である。同時に涸沼の中で

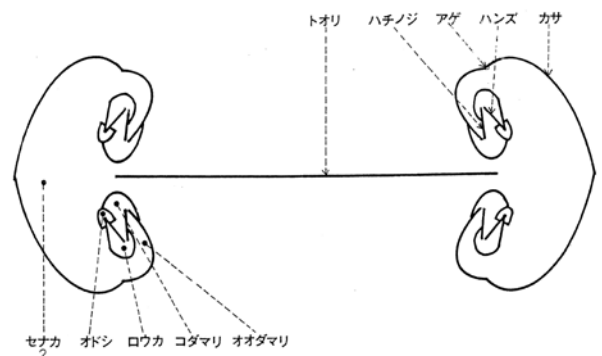


図2 スマキの各部位の名称

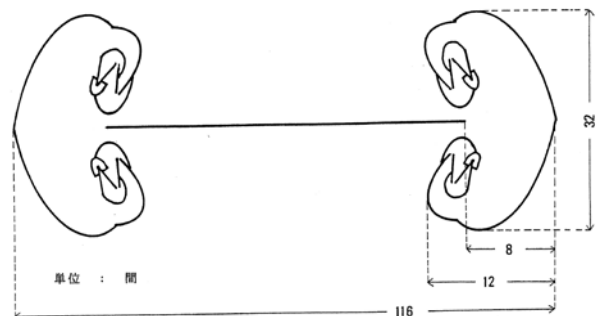


図3 スマキの規模—涸沼における最大級のもの—

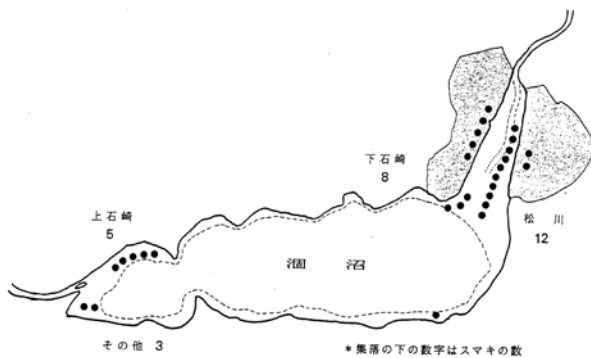


図4 スマキの行われた場所—昭和初期—

最後までスマキが残ったのも松川である。

松川でのスマキの起源については、江戸時代に「殿様」から「松川六十三戸」に権利が与えられたものであるという伝承がある。その事実関係は不明である。また、スマキの技術は仙台または北浦から酒沼へ伝わったとされる。ただし、北浦や霞ヶ浦に見られる定置性迷入陥奔漁具は、琵琶湖のエリと同様に岸辺に基点を設けて、そこから水面に傘を広げた形を成すいわゆる突き出し型であり、酒沼でスマキを建てていた人たちは北浦や霞ヶ浦のものとは建造の手口がまったく異なるという。その違いを生み出す最大の要因が、酒沼を汽水域にしている潮の定期的な流入にある。

図4に示した通り、スマキは酒沼川の流出口の付近に広がる水深2メートル以下の浅堆地に集中して見られた。1920年代後半、酒沼には全部で28か統のスマキが有ったといわれるが、上記の浅堆地に面して立地する松川に12か統と下石崎に8か統が存在した。

こうした浅堆地の特徴は、浅く平らであるというだけでなく、海の干満の影響により、6時間おきに潮の上り下りがあることが挙げられる。海の魚はその潮の流れに乗ってやってくる。そうした魚を潮をうまく受け止めるようにスマキを建てて迷い込ませるわけである。構造上はスマキは魚の上りと下りの両方に対応する形になっている。

3. スマキと潮

スマキが多く分布する酒沼川流出口（酒沼東部）は、潮の干満の影響を受け「塩水半分」といわれる状態にある。その浅堆地の流心部に強い潮流の行き来する一本の筋がある。それをミオ（滞）と呼ぶ。ミオは酒沼川の延長線上に浅堆地を突っ切るように流れており、周りの浅堆地に比べると一段深くなっている。これがスマキに

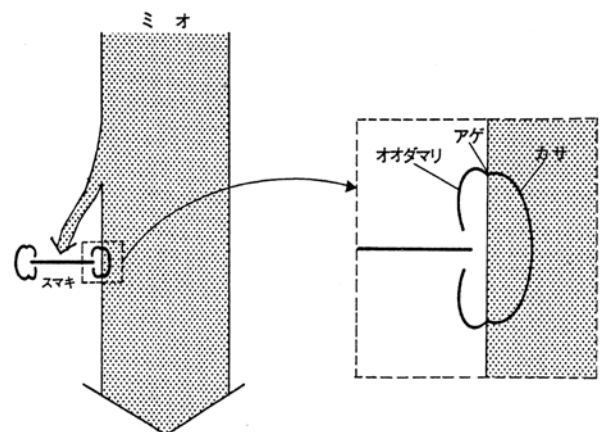


図5 スマキをミオに掛けて建てる技術—潮の呼び込み—

としては大きな意味を持っている。

スマキは通常は3～7尺（90cm～2 m 10cm）ほどの水深のところに建てるが、より高度になると、ミオの支流をうまく受け止めるように建てる。ミオの流れの一部を受けることにより、より多くの海産魚の漁獲が期待される。この場合、ミオの支流を受け止めるようにしてスマキの方向を決める。

また、スマキ建てに長けた人になると、図5にあるように、スマキのカサの部分をもミオに少し掛けることにより、ミオからの分流を半ば人工的に作り出し、それをスマキに呼び込むこともできた。ただし、ミオ自体にスマキをかけることは禁止されている。また、実際は禁止されるまでもなく、ミオの流心を通る強い潮を、スマキのトオリで直接受け止めることはとうてい無理であるという。

もうひとつスマキと潮の関係で忘れてはならないのは、その形態が潮により大きく規定されている点である。酒沼は干満の影響を受け6時間ごとに潮の流れる方向が180度変わる。そうした6時間ごとに方向の変わる潮流に対応する形として、定置性迷入陥奔漁法としては一般的な形態である突き出し型をとらず、傘の内側を向き合わせたようなスマキ独特の形ができています。潮の上りにも下りにも対応するように、左右対称でしかも両側に2か所ずつ、やはり対称形をなすように捕魚部のオドシが設けられているのはそのためである。この形態はたとえば琵琶湖ではサカサガケ（逆さ掛け）といっておく例外的な場合を除き、けっしてやってはいけないものとされている。